

インド密教とマンダラ

大正大学講師・真言宗豊山派南蔵院住職
野口圭也

第4回 「マンダラ」ということば（2）

I. 「マンダラ」の意識

さて一方、サンスクリット語の"maNDala" の意識語としては「壇」「輪」「輪円」というものがあります。「曼荼羅壇」と、音写と組み合わせられて用いられる場合もあります。「壇」とは、様々な宗教儀礼を行う、土を盛り上げた高いところを意味します。マンダラに限らず、古代インドの宗教儀礼は、多くが屋外で行われました。地面の上に土や日干しレンガでマウンドを築き、そこに聖なる存在を召喚し、火を燃やしたりして（護摩の原形です）儀式を行いました。中国古代においても同様であったかと思われまゝ。壇の字の土へんの右側のつくりの部分、太陽の神をまつるための一段高くなっている平地を意味するそうです。マンダラもおそらく、初期の形態では屋外に一段高いマウンドを築いて、その地面の上に描かれたり、あるいは布に描かれたマンダラを祀ったりしたものと考えられます。

「輪」や「輪円」は、前回述べたように"maNDala" ということばの基本的な意味が「円」「丸いもの」であることによる訳語です。漢字の「円（圓）」には、形としての円形ばかりでなく、「かけたところがない」「あまねく」という意味が含まれる場合があります。「輪」にも、丸い形から転じて、車輪のように回転すること（「輪が廻る」と書いて「輪廻」ということばがあります）、あるいはいくつかの要素の組み合わせが完成するものをも言う場合があります。

たとえば仏教用語の一つに「三輪清浄」というものがあります。他人に対して施し（布施）の行を実践するときの心構えで、布施を行う主体（能施＝施主）と、それを受け取る側（所施）と、施す物（施物）の三者が、空であり清らかでなければならない、という教えです。施す人が「これを施して名声を得よう」と期待したり、施す物について「もっと良い物もあるけれども、あいつに施すのはこれで充分だ」と区別をしたり、施しを受ける人が「これっばかりではなく、もっと施してくれるべきだ」と文句を言ったり、という損得の考えや誤った分別を伴う布施は、真に正しい行いではない、ということです。

このような価値判断や意図の全く込められていない施しを実践するのは、実際には大変難しいことであろうと思われまゝ、大乘仏教の布施の理想として、『心地観経』という経典に説かれているのです。この「三輪清浄」の原語は、"tri-maNDala-pariCuddhi" です。"tri" は「三」、"maNDala" が「輪」、"pariCuddhi" が「清浄」を意味します。「三輪」ということばは、三つでワンセットが完成しているものを指すので、「身・口・意の三つの行為」とか「如来・菩薩・明王の三つの衆生教化の姿」など、他にもいくつかのセットがあります。ここでは「施主・受け取る人・施物」の三つで、大乘仏教の重要な実践である「布施行」が完成することから、「三輪」の語を用いているわけです。

この例から考えますと、"maNDala" とは、単なる「丸いもの」ではなく、セットが完成しているもの、すべての構成要素を円満完備しているもの、というニュアンスが生じてくることとなります。これは密教のマンダラにとって、極めて重要な意味を持つこととなります。真言宗において重視している『秘蔵記』（空海の師匠である恵果の説を空海が書き留めたもの、と真言宗では伝承していますが、実際のところは不明）という書物には、「マンダラとは三密円満具足の意味である（曼荼羅謂三密圓滿具足之義）」と説かれています。

サンスクリット語の仏教文献は、チベットへの仏教伝来に伴い、漢訳をはるかに上回る膨大な数がチベット語に翻訳されました。チベット語とサンスクリット語では、言語の構造そのものが大きく違っていますが、チベット語訳はサンスクリット語からの正確な直訳（まさに直接的な訳）を意図している点が、翻訳の上での漢訳との大きな違いです。

"maNDala" のチベット訳語には、①「キンコル (dkyil 'khor)」または②「コルロ ('khor lo)」がありますが、①の「キンコル」が一般的です。①と②の両方に「コル'khor」という同じ語が含まれています。これは「輪」または「円」を意味し、②のコルロ ('khor lo) は「円」「輪」を表す最も普通の語で、サンスクリット語では「チャクラ (cakra)」ということばに最もよく対応します。①にある「キル (dkyil)」は、単独では「中心」「底」を意味します。「コル」と合体して少し発音が変わり、「キンコル」という語全体で「円・球体・円盤」、そして「マンダラ」を表しています。

チベット訳語が「中心」ということばを「輪」に付加しているのは興味深いことです。もともと、円も球も、必ず中心が意識されています。ある点（中心）から等距離の点の軌跡が、同一平面上では円であり、三次元空間では球なのですから、中心あつての円であり、また球であるということが言えます。そして実際に造形されるマンダラでも、中心（特に中心のほとけ）ということが必ず意識されています。中心あつてのマンダラなのです。

II. マンダラの語義解釈

マンダラについての解説書を読むと、ほとんどの場合で次のような語義の解釈が説かれています。すなわち「マンダラ」ということばを「マンダ」と「ラ」に分解し、「マンダ (maNDa)」とは「本質」あるいは「心髄」であり、「ラ (la)」とは「所有を表す接尾辞」なので、両者を合わせて「マンダラ (maNDala)」とは「本質を有するもの」である、というのです。接尾辞とは、単語の最後に付加されて、意味や語法の変化をもたらす小辞のことです。しかしこの解釈は、サンスクリット語の説明としては無理があります。

サンスクリット語の -la には、「所有を表す接尾辞」という意味はありません。-la ではなくて、接尾辞-ra が付いて「所有」を意味している場合がいくつかの単語（特に「甘い」とか「しょっぱい」とかの、味を表す語）に見られます。例えば、「甘い」を意味する "madhu" という語に接尾辞-ra が付いた "madhura" は、「甘さ」という意味の他に、「甘さを持つもの」ということで、サトウキビのような「甘みのある植物」を表します。

しかしこの例を"maNDala" にそのまま当てはめるのは、文法的・言語的には困難です。上記の「マンダ+ラ」の解釈は、言語的な語源説明ではなく、「教理からの説明」と言うべきものです。このような解釈がなされて、今日まで定着している根拠は、次節で取り上げる『大日経』の漢訳とチベット語訳にあります。

サンスクリットの "maNDa" は、「米を炊いたときなどの浮きかす・ミルクの薄皮・泡・精粹(エッセンス)」という意味が辞書に載っています。いずれも液体中に含まれる成分を表しています。漢訳では「汁」とか「餅」と書かれることがあります。また乳製品の用語として、「サルピルマンダ (sarpir-maNDa)= 醍醐のエッセンス」「ダディマンダ (dadhi-maNDa)= 酪のエッセンス」というものがあります。いずれも牛乳の精製物の、そのまたエキスを意味します。したがって「マンダ」の語は、「凝縮精製物」の意味でのエッセンスと理解するのは良いのですが、「本質」と訳すと少しニュアンスが違ってしまいます。例えばヴァニラエッセンスを「ヴァニラの精粹」と訳すとしても、「ヴァニラの本質」と訳したのではすこし具合が悪いと思います。「成分が最も凝縮されたもの」という意味で、「精髓」「心髄」あたりの訳語ならば可能でしょうか。

III. 『大日経』におけるマンダラの語義解釈

日本における代表的なマンダラの一つである「胎蔵マンダラ（大悲胎蔵生マンダラ）」は、『大日経』という経典に説かれています。この経典は『大毘盧遮那成仏神変加持経』という大変長い題名を持っていますが、このままでは長すぎるので、ふつうは『大日経』と略して記します。『大日経』では、マンダラということばの意味を「比べるものの無いほどの極めてすばらしい味〔を持つもの〕、これ以上のものは無い味〔を持つもの〕である。このため、マンダラと説くのである（極無比味、無過上味なり。この故に説いて漫荼羅となす[大正大蔵経 vol.18,5b28]）」と説明しています。これは明らかに、上記の「マンダラ」に基づいた解釈です。

漢訳で「味」ということばを用いているのは、もしかすると先に記した「所有を表す接尾辞-ra」を持つ語の例を意識しているのかも知れません。『大日経』は、インド人僧侶の善無畏（シュバカラシンハ CubhakarasiMha, 637-735）と、当時の中国仏教界最高の秀才と言ってよい、中国人僧侶の一行（いちぎょう）(683-727)によって漢訳されました。善無畏はインド人のインテリですから、接尾辞-ra の用法を知っていたと思われます。それを踏まえて、中国人にも分かりやすいように、このような意識を施したのではないかと想像されます。

一方チベット語訳では、次のようになっています。

"dkyil" とは「精髓(ニンポ sJiG po)」であり、"khor" とは「充滿した(ゾクパ rdzogs pa)」である。それ意外に精髓となるものは他にないので、「マンダラ(dkyil 'khor)」と言うのである。[服部融泰校訂『藏文大日経』p.55, ll.6-7]

ここでもやはり、「マンダラ」の解釈を説いています。ことばの意味として厳密には対応しないのですが、チベット語の "dkyil" をサンスクリット語の "maNda"、同じく "khor" を "la" に当てはめています。そのうえで、マンダラのチベット訳語「キンコル(dkyil 'khor)」を「ニンポゾクパ(sJiG po rdzogs pa)」と言い換えているわけです。

ここで「精髓」と訳したチベット語の「ニンポ(sJiG po)」は、「maNda」の訳語としても用いられますが、他にもいくつかのサンスクリット語の訳語となり得ます。この部分は、「マンダとは～である」と言い換えをして、「maNda」という語の意味の説明を行っているのですから、この"sJiG po"の原語は、「maNda」ではない、別のサンスクリット語です。「sJiG po」の原語に相当するいくつかのサンスクリット語の中で、ここで最も適切であると思われるのは「サーラ(sAra)」ということばです。「sAra」という語は、「何かあるものの核心(core)・真髓(pith)・最上の部分(cream)・精髓(essence)・本質(substance)」を意味します。「maNda」とかなり近い意味と言えます。

一方、「khor」の説明である「ゾクパ(rdzogs pa)」は、ここでは形容詞として「充滿した」と訳しましたが、「完全な」「満たした」と訳すこともできます。動詞として「完成する」という意味もあります。「ニンポ」とつなげると、「充滿した精髓」「完全な精髓」（チベット語の形容詞は後ろから前の名詞を修飾します）、あるいは「精髓を完成する」となります。このチベット語訳からマンダラの意味（語本来の意味ではなく、『大日経』の教理体系において "maNda" の語が表している意味）を解釈すると、マンダラとは「精髓(エッセンス)が充滿しているもの」ということになります。これは「教理的解釈」です。

ところで漢訳やチベット語訳に依らないで、何で初めからサンスクリット語そのものによって解釈しないのか、と思われるかも知れません。しかしそれは、現在では不可能なのです。『大日経』全体のサンスクリット原テキストは現在まで発見されておらず、『大日経』の原典研究を行うには、今のところ漢訳とチベット語訳に頼る他はないのです。